

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：23531142

研究課題名(和文) 応用演劇的实践コミュニティに基づく学校臨床社会学的研究

研究課題名(英文) A Clinical Sociological Study of Schools Based on an Applied Theatre Practice Community

研究代表者

秋葉 昌樹 (AKIBA, Yoshiki)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：30330020

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、応用演劇的实践をとおりて、そこに参加する養護教諭ら教育実践家自身が、学校教育現場における実践コミュニティの一端に対して、批判的に検討することは如何にして成り立ちうるかを、エスノグラフィックに分析・理論化し、学校臨床社会学的研究の新たなモデルとして提示することを目的として実施された。応用演劇とは、A. ボアールがフォーラムシアター等としてはじめた、社会問題等の考察のために演劇を使う実践であるが、本研究では、学校臨床社会学的研究を応用演劇によって進めることで達成されうる地平について、本研究における実践に関する社会学的分析とともに、理論化作業を行なうべく、以下に掲げる成果を公表した。

研究成果の概要(英文)：This study critically examines a type of practice community within school education sites using the practice of Applied Theatre in which school nurses and educational practitioners participate. The study's objective is to ethnographically analyze the practice and theorize ways for making the practice of Applied Theatre feasible, in order to present a new model for conducting clinical sociological research in schools.

Deriving from the Forum Theatre of Augusto Boal, Applied Theatre uses theatre practice for facilitating discussions on social and other issues. Taking into account the impact of advancements in clinical sociological studies on schools using Applied Theatre, this study contributes to the existing theoretical knowledge on the subject through the results of the sociological analysis of the Applied Theatre practice.

研究分野：教育社会学

キーワード：学校臨床社会学 実践コミュニティ 応用演劇 養護教諭

1. 研究開始当初の背景

応用演劇は、演劇学の一領域として海外で実践例が蓄積されつつあるが、日本での認知は極めて限られたものに留まっている。しかし文部科学省が2010年度から開催している「コミュニケーション教育普及協議会」の主要メンバーに第一線の演劇家や演劇教育の実務家が多く参画したことにも象徴されるように、“演劇を使う”教育実践研究のあり方は、今後大きな潮流となりうる。現場実践家自身が主体となり、問題解決のコミュニティ的实践として応用演劇を用いる本研究は、学校臨床的社会学研究に対しても、また上述の流れに対しても理論的素地を与えることで貢献することになると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、応用演劇的实践をとおして、そこに参加する養護教諭ら教育実践家自身が、学校教育現場における実践コミュニティのあり方に対して批判的に検討することは、如何にして成り立ちうるかを、エスノグラフィックに分析・理論化し、学校臨床社会学的研究の新たなモデルとして提示することを目的として実施された。

応用演劇とは、A. ポアールがフォーラムシアター等としてはじめた、社会問題等の考察のために演劇を使う実践であるが、本研究では、学校臨床社会学的研究を応用演劇によって進めることで達成されうる地平について、実践に関する社会学的分析とともに、理論化作業を行なうべく、以下に掲げる成果を公表した。

3. 研究の方法

主要な研究方法として、参加型の演劇ワークショップ(=応用演劇ワークショップ)を通じて、その過程で従来は研究対象としてカテゴライズされる当事者が、如何にして問題考察の主体となりうるかについて、エスノグラフィックに考察すること。伴って応用演劇ワークショップの可能性について、内外の先

行研究等を参照しつつ、理論的かつ方法論的考察を行なうこと。

4. 研究成果

(1) 主要研究成果

臨床教育研究としてのフォーラムシアター：社会学的考察の試み

本論文の目的は、フォーラムシアターと呼ばれる応用演劇の手法によって、養護教諭が日常的に抱える問題意識やその仕事の流儀と向き合う作業を支援する方法について考察し、「教育臨床の社会学」の新たな展開可能性を探ることにある。

フォーラムシアターは、観客ないし演じ手が日頃直面しがちな問題をとりあげ劇として上演し、観客を巻き込んだ討論(フォーラム)と劇(シアター)の再演を繰り返しながら問題状況における変化、変容可能性を探っていく手法である。それはいわば演劇を用いた社会教育的実践とも言いうるものだが、その応用的性格からか、理論的定式化は必ずしも十分に進められてこなかった。

本論文では、この手法がもたらす当事者支援の可能性を視野に、筆者が養護教諭らのグループとともに運営してきたフォーラムシアターを事例として分析した。その結果見えてきたことは、フォーラムシアターという手法によって、参加者である養護教諭が、日頃の葛藤や問題意識を共有しつつ再認識し、またそれら乗り越えるべく主体的に探究を開始し、今後の変容可能性を見いだしているということである。そして本論文では、参加者によって主体的に見いだされる変容可能性が、フォーラムシアターが備える遊戯性および“未完”性という構造的特質によってもたらされることを明らかにした。

エスノメソドロジーとエンゲキのあいだ

近年、教育現場の質的調査研究において臨床的研究の必要性が目撃されつつある。教育実践を対象とする臨床的研究には教育現場に根ざし、問題の解決に資する研究であるこ

とが求められているが、そうした文脈で焦点の一つになっているのが、研究対象に対する知見のフィードバックを巡る問題である。本研究では、まずこの問題の背景が、質的調査が知見として提示される知識が、研究対象コミュニティにおいて産出される日常知がもとになっている一方、知見産出の主体が研究者サイドにあるという、知見産出を巡る構造にあることを指摘した。

その上で、その構造がもたらす臨床的研究としての可能性と限界は、質的調査の中でも日常知に照準を合わせた理論的、方法論的立場を採るエスノメソドロジー研究の場合、どのような形で現れるのかについて、報告者の研究経緯を批判的に振り返りながら考察した。

最後に、本研究では、知見産出を巡る上述の構造を乗り越え、研究対象自体が産出主体ともなる可能性を秘めた方法論として、演劇を用いた社会教育実践の方法であるフォーラムシアターをとりあげ、その特徴にはエスノメソドロジー研究の新たな手法として位置づけうる可能性があることを示した。

教育実践としてのフォーラムシアターにおける参加と接続：物語性、“未完”性、身体性、共同性

本論文では、フォーラムシアターの意義を考える上でのポイントを、フォーラムシアターへの「参加」と「接続」とでも呼びうる仕組みに照準を絞り分析した。フォーラムシアターという演劇的空間には、観客を単なる観客ではなく、“参加する観客”にし、フォーラムの成果を、演劇的空間の外部に接続させる可能性が具体的に分析可能であり、そうした可能性ゆえに、学校臨床社会学に対して一定の貢献が見込まれると考えられるからである。これらの可能性を実現する仕組みを明らかにする上で、本稿ではフォーラムシアターの構造と機能について、(1)物語性、(2)“未完”性、(3)身体性、(4)共同性という4つの柱

を立て分析した。

これらのうち、前2者は主に「参加」を、後2者は主に「接続」をもたらす仕組みに関連するポイントである。このことをとおして、本論文は、フォーラムをシアターで実施する意義、さらにはその仕組みにみられる教育実践としての意義を考察した。

本論文では、フォーラムシアターの構造が、フォーラムシアターに集う人々を“参加する観客”にし、人々が“参加する観客”となることで、その成果を参加者らが住まう現実社会、つまりフォーラムシアターの外部に接続させていく仕組みとして機能していることが明らかになった。“参加する観客”は、問題に直面する参加者と参加者を取り巻くコミュニティを問題解決の主体となるよう意識化され、エンパワーされた存在となり、持続的に互いを支援しうる存在へと社会化されていくのである。しかもフォーラムシアターはフォーラムの中で実演されたアイデア群に対して、アイデアの集約を目指すことはなく、優劣の評価をつけることもしない。参加者は、試行が繰り返される中で、学ぶのである。

フォーラムシアターは、以上のことから分かるように、演劇が人々の教育に貢献しうる道具となりうることを示す重要なモデルとして位置づけることができると考えられるが、言うまでもなくその教育実践としてのあり方は、教えることによってはじめて学ぶことができる近代的学校教育系列のモデルではない(イリッチ 1971 など)。むしろそれは、ポアールが「民衆に、民衆じしんがつかうことのできる演劇的な生産手段を手わたすべきだ」と主張し実行してきたことから分かるように、教えることに重きは置かれぬ。教えを内面化しようとするなら、伝統的な、アリストテレスの「悲劇」のスタイルで、観客を客席に固定しておけばよい。それは目指されない。

つまりフォーラムシアターでは、“学ぶことを学ぶ”ないしは“学ぶ仕方を学ぶ”（里見実）ことで、問題と向き合う身体の構えをつくる、いわば学びの主体形成のためのモデルとして位置づけることができると言えるであろう。

(2)その他の成果

以下には、上述の主要研究成果（論文）としてまとめられてはいないものの、本研究の経過報告ワークショップおよび実践成果として報告した主要な研究発表について記すことにしたい。

京都国際舞台芸術祭（KYOTO EXPERIMENT2014「使えるプログラム」批評講座・理論編 2013年9月、GACCOHにて報告）において本研究の初期段階の成果をふまえワークショップ形式で報告した。以下はワークショップの概要である。

本報告における問いは、演劇は、教育現場における実践知と出会い直す営みに使えるのではないかと、というものであった。しかし従来、実践知にアプローチする教育研究では、その方途は限られていた。現場に研究者が参与観察に向くやり方はその代表的なものだが、そこでは実践の主体が研究の対象ないしは客体となってしまう。つまり構造的に、研究主体とはなりづらいのである。

演劇と教育のインターフェイスで語られるべき主題のひとつは、演劇を使うことで、こうした構造的な問題と如何に対峙し、乗り越えるかということにある。こうした問題意識について、本研究における実践分析を紹介し、フォーラムを実施した。

日本教育保健学会（2015年3月22日、日本福祉大学）において、一連の研究をふまえ、応用演劇ワークショップを実施した。タイトルは「わたしの問題、あなたの問題、それが問題：フォーラムシアターで考えよう」とし、本研究の中心命題である、養護教諭ら教育実践家自身によって、自らがそのメンバーでも

ある現場コミュニティの批判的検討、問題発見や解決の糸口探索する仕組みについて体験的にシェアする機会とした。そしてその仕組みが学校臨床社会学研究に投げかけることは、以下に示すワークショップの概要に集約されている。すなわち

現場での実践を形にする方法として、近年、質的研究のスタイルが注目されるようになってきているが、量的研究と比較した場合、その方法や背景にある理論的根拠などが多岐に渡っており、簡単に着手しづらいのもまた事実である。しかも、そもそも多忙な現場で実践研究をするには、日常+ の負荷がかかってくることであろう。それでもなお、自身の実践を対象に研究する質的研究には、リフレクションとして一定の意義があると考えられる。

リフレクションには「自己反省」という意味と「再構成」という意味の二つの側面があるとされている。一歩引いたところから経験を客観視し、相対化することは、これからの職業人としてのあり方を再認識することにもつながりうるし、研究発表をすることにより、同様の現場で教育に取り組む専門家に対しても、示唆を与えうるであろう。わたしの問題は、わたしだけの問題ではない。あなたの問題はあなただけの問題ではないのである。しかし、いったん「研究」という構えをとるやいなや思考は内閉し、自問自答の迷宮に嵌まり込まないとも限らない。

このセッションでシェアする方法は、フォーラムシアターと呼ばれる応用演劇のスタイルをとる質的研究である。それは現場研究によりもたらされうる上述の意義をストレートに「研究実践」の過程で体感する方法とも言えるのである。

(3)コメント

上述のように、本研究では一貫して、応用演劇の実践によって、養護教諭ら教育実践家自身が、学校教育現場における実践コミュニ

ティのあり方に対して批判的に検討することは、如何にして成り立ちうるかを、エスノグラフィックに分析・理論化し、学校臨床社会学的研究の新たなモデルとして提示してきた。しかもそのモデルとしての可能性は、一般的なコミュニティ変容の触媒としてのフォーラムシアターをはじめとする応用演劇の理論的検討のみならず、養護教諭をはじめとする学校現場における個別具体的問題への応答可能性という観点からも検証されたところに本研究の独自性があるものと考えている。

5.主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

秋葉昌樹「臨床教育研究としてのフォーラムシアター：社会学的考察の試み」『教育社会学研究』92集、2013:199-218(査読無)

秋葉昌樹「エスノメソドロジーとエンゲキのあいだ」『現代社会理論研究』8号、2014:3-13(査読無)

秋葉昌樹「教育実践としてのフォーラムシアターにおける参加と接続：物語性、“未完”性、身体性、共同性」『龍谷大学論集』第484号、2014:7-19(査読無)

〔学会発表〕(計6件)

秋葉昌樹「理論と実践をつなぐ：会話分析、フォーラムシアター」岩手県立大学社会福祉学会第15回シンポジウム、2013年8月10日、岩手県立大学(岩手県岩手郡)

秋葉昌樹「エスノメソドロジーとエンゲキのあいだ」日本社会理論学会第8回大会、シンポジウム「社会学理論の射程 理論と実践のはざままで」、2013年9月8日、成城大学(東京都世田谷区)

秋葉昌樹「ヴァイオラ・スパーリンが考えたこと」ともいき大学、2013年10月19日、龍谷大学(京都府京都市)

秋葉昌樹「臨床教育研究としての応用演劇」京都国際舞台芸術祭(KYOTO EXPERIMENT2014「使えるプログラム」批

評講座・理論編 2013年9月14日、GACCOH(京都府京都市)

秋葉昌樹「物語、身体、“未完”性、きょうどう性：フォーラムシアターにおける学びの可能性」『学びの現場から～SPT ワークショップラボ 2014-2015』2014年9月12日、世田谷パブリックシアター(東京都世田谷区)

秋葉昌樹「わたしの問題、あなたの問題、それが問題：フォーラムシアターで考えよう」日本教育保健学会第12回年次学会フォーラムセッション、2015年3月22日、日本福祉大学(愛知県半田市)

6.研究組織

研究代表者：秋葉昌樹(AKIBA YOSHIKI) 龍谷大学・文学部・教授、研究者番号:30330020